

(第2日目)

森 行 雄 ※

草地研究会主催の現地研究会は、第1回目が札幌近郊、次いで天北、根釧、道南地方で開催されたと記憶しているが、参加したのは今回の日高地方が初めてである。

北農試の玄関前で乗車した時、現地研究会資料と同時に一通の封書が渡された。“何か良いことでもあるのかな。”と思い開封したら現地研究会に参加しての感想文の依頼である。

第1日目は別の方が担当し、私は2日目についてである。紀行文でもよし、感想文でもよいということであるが、まともな文を書く才能もないので、現地研究会雑感として思いついたままを並べて責を果すことにした。

日高山脈の南端が大平洋の荒波と濃霧のかなたに落ちるところ、襟裳道立公園の中心地である襟裳岬の旅館で一泊した研究会員一行は、北海道草地研究会総会から第2日目の研究会が始まった。7時30分から総会が開かれたが、前日の疲れも見えず出席率は上々である。開会前に岬の灯台を見てこられた方も多しである。総会は46年度の事業報告と47年度の事業計画が主な議題である。役員、幹事からの提案説明が適切で、短時間で満場一致可決となる。メダタン、メダタンといたいところであるが、少ない事業費で盛り沢山の事業を遂行する役員、幹事の方のご苦労を思い深く敬意を表する次第である。

8時、2台の貸切バスに分乗したわれわれは、2日目の第1会場である襟裳肉牛牧場に向って出発した。庶野までの海岸沿いの道は、荒涼とした赤土地帯の中を通っている。右手の浜を百人浜と名付けられているが、これはその昔、奥地御用に向った南部藩の用船が沖で難波し、辛うじてたどりついた百人も、飢えと寒さのために死亡したことに因んで名付けられたということである。浜辺の石に一字づつ経文を刻んで追善供養した“一石一宇塔”の塔を左にみながら、庶野で左折れし、追分峠を登り切った所が、襟裳肉牛牧場の入口である。今は「襟裳肉牛牧場」という立派な標識が国道わきに立っていて、始めて訪れる人でも間違いなく行けるが、この標識は恐らく今年樹てたものであろう。昨年(昭和46年)私がこの牧場を訪れた時は、入口がわからず通り越して仕舞った経験がある。また、悪いことにこの牧場とまぎらわしい名前の牧場が、追分峠をえりも町に向って下り切った所にあるからなおさらである。その牧場の名前は“えりも牧場”という。もちろん“えりも牧場”は“襟裳肉牛牧場”より遙か先輩で、この地方の人々にはなじみ深い名前であるから、若し始めて尋ねる場合には、襟裳肉牛牧場の肉牛という言葉をおぼれないうようにして聞くことが大切であると考えた。

襟裳肉牛牧場は、道内における肉牛の生産を積極的に推進する目的で、昭和42年度に北海道肉用牛生産振興方針に基づいて設立したもので、昭和43年度から設置事業が開始され45年度に完成している。なお、これまでの年度別経過の概要は次の表のとおりになっている。

※ 北海道立道南農業試験場 主任専門技術員

第1表

区分		年度					計
		41年	42年	43年	44年	45年	
用地	道有林					所管替 60.0ha	
	町有林			えりも町より購入 845.9ha			
草地	採草地			47.0ha	67.6ha		114.6ha
	放牧地				12.3 "	135.6ha	147.9ha
造地	耕法				30.0 "	30.0 "	60.0ha
	利用計			47.0	109.9 "	165.6 "	322.5ha
共同利用模範牧場			調査↓計画 設置↓計画 同意↓承認 決 ↓ 定 (42年度)	設置事業1年目 基本施設 事業費40028千円	設置事業2年目 基本施設 農業用施設 経営手段 事業費20800千円	設置事業3年目 基本施設 農業用施設 経営手段 事業費18328千円	譲渡(4月1日付) 事業費 431316千円 建設利息 13990千円 総計 445306千円 補助金 237223千円 借入金 208082千円
牧場事業				アバーデインアングス ヘレフォード種 放牧 160 舎飼 200	アバーデインアングス ヘレフォード種 放牧 330 舎飼 330		
職数				専任 5名	専任 9名		

この牧場は、日高山脈が襟裳附近に望むあたりに位置しており、標高は260m～350mの範囲にあつて、かなり急傾斜の地形が多い。

前島場長に案内されて、下り立った所から眺めた景観は実にすばらしい。「えりも岬」は霧に包まれて確認はできないが、東側にみえる百人浜のきれいな孤を描いた海岸線と折寄せる白波、荒涼な原野の中に散在する農耕地が織りなすモザイク模様等々、研究会に来たことを忘れるばかりの眺めである。

この地方の風の強さは、恐らく全道随一であろうということであるが、幸いこの日は穏やかであった。然し10月も中旬になると、弱い風ではあるが寒さが肌に刺さる様である。

草地造成面積330ha、飼養肉牛はアバーデインアングスとヘレフォードあわせて、放牧は約900頭、冬期舎飼500頭ということである。これだけの草地管理と肉牛飼育を10数人で行なっているというから並大抵の努力ではないと思われる。このような大型牧場の経営については、試験研究機の成績はほとんど皆無という現状であるから、やること成すことすべてに未知の

分野が多く、いわゆる試行錯誤によって方向を決めなければならないものと推測される。このようなことを考え、これからの農業も大型化するのだから、これに対応できる試験成績を早く出して欲しいものだと強く感ずる次第である。

私の職業柄、草地について直ぐ心が向いて仕舞う。今回は時間の関係で広範囲にわたって見学することはできなかったが、採草地にしても放牧地にしても立派に管理されているのには感心させられた。先に書いたように、46年の夏に一度訪れたのは、計画通りの草生産ができないので、そのコンサルテーションのためであった。あれから1年しか経っていないが、このように立派な牧草地になったのは、場長始め職員の一致した努力の結果であり、頭のさがる思いがする次第である。特に蹄耕法による草地造成は抜群である。

放牧は5月から11月まで草地に、その後は12月末まで野草地に放牧しているが、増体は良好のようである。種付けは5月上旬から8月まで、「マキ牛」によっている。種雄牛13頭がいるが、1頭の種雄牛に対し40~50頭の雌牛を割当てている。受率90%ということである。この期間に種雄牛の体重は約100kg減量するそうである。あまり多く雌牛を割当てると受胎率が低下し、また種雄牛の耐用年数が短縮し、早く「恍惚の人」ならぬ「恍惚の牛」になるということであろう。

カラスの害は都市近郊のゴミ捨て場付近だけかと思っていたが、人里離れたこの牧場にも被害があるという。それは牛の分娩を狙って何処からかやってくるそうである。

場内道路の左右の草地にアンガスとヘレフォードの大群を移動して、われわれ一行が放牧状況を見学し易い様に配慮して下さった厚意に感謝しつつ日高種畜牧場へと向った。

襟裳肉牛牧場と日高種畜牧場の間はバスで約1時間30分を要する。第1日目通った国道にて、えりも町、様似町を通過して日高種畜牧場に着いたのは11時を過ぎていた。

日高種畜牧場の歴史は非常に古く、明治40年6月19日の創設ということである。長い間種馬牧場として多くの優駿馬を産出したが、多幾の変遷を経て、現在の乳用子牛の集団育成事業一筋に専念することになったのは昭和42年9月からである。

浦河市街地より西幌別を経て12Kmの地点にあるが、現在の総面積は2,400ha、乳牛飼養頭数約1,300頭というから、普段、個人や共同経営の酪農をみているわれわれにとってはケタはずれに大きく、何かピンとこない感じである。

場員の方に案内されて展望台から眺めた採草地は、正に緑のジュタンを敷きつめた様で実に美しい。こんな景色をみながら、説明された主な内容は概ね次のようである。

この牧場の地質は大別すると腐植質黒色壤土の高地帯と、幌別川流域の沖積土壌であるが、沖積土壌は本牧場の採草地の中心となっている。

何せ大量の乾草、サイレージを調製しなければならないので、収穫、調製を如何に能率的に進めるかが一番苦労するそうである。サイレージ詰込量4,000トン、仕上り乾草2,500トンという膨大な数量である。草種はオーチャードグラスが主体になっているが、いかに機械化一貫体系でも刈取りに早晚がでるのは当然である。それで、若刈りした牧草サイレージは主として若手に、刈り遅れのサイレージは成牛に給与するように仕分けている。

この牧場での乳用仔牛の集団育成用の素牛は、生後1週令および6カ月令の雌仔牛を、近畿以北の地域より購入し、集団的に粗飼料給与を主体に育成して妊娠させた後、24カ月令前後で全国的に払下げ、乳牛の改良と酪農経営の向上に寄与すべく、努めている。払下げ価格の決定には評価委員会を組織しており、ここできめることにしている。このほか、新冠種畜牧場生産の候補種雄牛の後代検定事業の一翼を分担しており、また、地方公共団体の共同利用牧場の管理者養成の目的で研修生の実務研修を実施している。

2日目の研修は、当初の予定では日高種畜牧場で終ることになっていたようであるが、ここをでて間もない所にある谷川牧場に立寄った。この牧場は有名な競争馬、「シンザン」を飼育している。競馬に縁のない私にもこの名馬の名前は記憶にある。現在11才であるが、現役時代の成績は抜群で、谷川さんの話によると、19戦15勝で、獲得した賞金は2億3千万円ということである。丁度この原稿を書いている時、菊花賞のレースが放映されていたが、その中で、7年前にこのレースを飾って去った「シンザン」の話をしていたが、今でも話題に出る程有名な馬なのに、今更ながら感心したり、恐れ入ったりしている次第である。競走馬の牧草は乳牛と管理が違うらしい。真偽の程は別として、使用草種は、ケンタッキーブルグラス、チモシー、オーチャードグラス及びホワイトクローバが主体で、赤クローバ、ラジノクローバはアクが強く、肥満するので不適だそうである。施肥は有機質を重点に行ない、堆肥と炭カル並びに骨材を使用することである。

一頭の価格、一億数千万円、種付料数百万というおよそ酪農とは桁はずれの数字に、ビックリするやら溜息をつきながら谷川牧場に別れを告げた。

その後、昨日と同じ道を一路札幌へ、途中トド岩ドライブインで休憩し、無事北農試に着いたのは午後6時頃であった。

(1972. 11.)